

高度の痛みにも「麻薬系鎮痛薬」も選択肢

医療法人将優会 クリニックうしたに
理事長・院長 牛谷義秀

おもに「がん患者」さんの「がん性疼痛（がんによる痛み）」に使われてきた医療用麻薬系の薬（オピオイド）が、非常に治りにくい頑固な腰痛などの、がんによらない慢性的な痛みにも使うことができるようになりました。日頃、どうしようもない程の慢性的な痛みで悩んでいる方には朗報ではないでしょうか？



1. 医療用麻薬系鎮痛薬とは

心筋梗塞が起こった時にみられる高度の胸痛や重度外傷の際の痛みを鎮めるために医療用麻薬が使用されることがあります。また、がんに関わっている患者さんの終末期では、少なからず「がん性疼痛」が起こり、その治療に医療用麻薬が使われています。「がん性疼痛」を治療する場合、WHO（世界保健機構）方式という模範的な治療法があります。痛みの強さを3段階に分け、段階的に鎮痛薬を選択する方法で、軽い痛みであれば、まず第1段階として一般的な非オピオイド鎮痛薬（NSAIDs【非ステロイド系抗炎症剤】、アセトアミノフェン）を使用します。それで効果が不十分な中程度の痛みの場合には、第2段階として麻薬系の弱オピオイド（コデイン）を追加します。さらに第3段階では、NSAIDs やアセトアミノフェンなどの第1段階の薬剤に強オピオイド鎮痛薬（モルヒネやオキシコドン、フェンタニール）を追加します。

最近になって、これまで治療困難な「がん性疼痛」に対して使用されてきた医療用麻薬系鎮痛薬は、中等度から高度の慢性疼痛の鎮痛に使用できるようになり、これまで他のいかなる治療薬でも改善が見られなかった痛みも軽快することが多くなり、痛みから解放された日常生活が送れるようになってきました。

2. 中等度～高度の慢性疼痛に使えるようになった医療用麻薬

腰痛症や足のしびれ、首肩の痛みや手のしびれ、関節痛などの原因は明らかになっていても、これまでに受けた治療でもなかなか改善せず、日常生活にも不便を強いられている患者さんがたくさんおられます。

ところが、筆者の外来にも以下の薬を処方し、人生が変わったような喜びの声を伝えてくださる方がおられます。

1) ^{こつそしょうしやう}骨粗鬆症・^{へんけいせい}変形性腰痛症にともなう高度の腰痛症

骨粗鬆症による圧迫骨折や変形性腰痛症のために円背が進み、背中が大きく曲がった結果、長期間にわたり高度の腰痛に悩まされている方がいらっしゃいました。NSAIDsといわれる痛み止めでは改善されず、デュロテップ MT パッチを使用したところ、劇的に改善され、大好きな買い物に出かけたり、プールにも通えるようになりました。デュロテップ MT パッチはモルヒネに比べて便秘や眠気などの副作用が少なく、またおもに肝臓で代謝されますので、腎臓の悪い人でも比較的安全に使用できます。皮膚からゆっくり吸収される持続性の貼り薬で、一度貼れば3日間ほど効果が持続します。

2) ^{こうじゆうじんたいこっかしやう}後縦靭帯骨化症・^{へんけいせい}変形性頸椎症にともなう高度の頸～肩痛、しびれ

長年にわたり、首から肩にかけての痛みで悩まされ、手術を勧められても今一つ踏ん切りがつかないままにやり過ぎていたところ、痛みに加えてしびれも出現し、^{ゆううつ}憂鬱な毎日を過ごしておられました。しかし、トラムセット配合錠の服用により、仰向けに寝られるようになり、また痛みによってもたらされていた夜間の不眠も解消され、喜びいっぱいのメッセージを寄せていただきました。

3) ^{せきちゆうかんきやうさくしやう}腰部脊柱管狭窄症にともなう高度の痛み・^{かんけつはこう}間欠跛行

腰部脊柱管狭窄症は、多くは老化が原因となって背骨が変形し、脊柱管と呼ばれる神経の通り道が狭くなり、足の方に伸びる神経が根元で圧迫されて足腰に痛みやしびれが出る病気です。また、この病気は「歩き出すとふくらはぎに痛みが走り、しばらく休むと再び歩ける」といった、間欠跛行が特徴的な病気です。歩行がままならないまでに悪化し、まもなく手術を受ける予定の患者さんにデュロテップ MT パッチを貼付したところ、日常生活に支障がないまでに回復されました。

このように、腰痛症などの中等度～高度の慢性疼痛に対して、2010年から2011年にかけて保険で使える医療用麻薬の種類が増え、その恩恵にあずかれる患者さんが増えました。現在、トラムセット配合錠、デュロテップ MT パッチ、ノルspanテープの3種類が使えるようになっています（表1）。



表 1. 慢性疼痛に対して使えるようになった医療用麻薬

商品名	分類	対象となる痛み	剤型
トラムセット配合錠	弱オピオイド 配合剤	軽度から中等度	錠剤
デュロテップMT パッチ	強オピオイド	中等度から高度	貼付剤
ノルspanテープ	弱オピオイド	軽度から中等度	貼付剤

3. 医療用麻薬を使う際の注意点

医療用とはいえ、もともと麻薬ですから、以下に示す注意が必要です。

- 1) 医療用麻薬は痛み止めだからと言って、安易に家族内や友人間で譲って使うことはできません。慢性疼痛に対する処方・調剤に際しては、医師との間で確認書（同意書）の受け渡しが必要です。
- 2) 慢性肺疾患など呼吸器系の病気や肝臓の働きが落ちているなど、持病やアレルギーのある人や他に薬を飲んでいる場合は、かかりつけの医師に御相談ください。
- 3) デュロテップMTパッチのような貼り薬は熱の影響を受けやすく、一般的に高熱では薬の吸収量が増加する性質があります。したがって、このような現象を避けるため、貼り付けている部分が電気毛布やカイロ、湯たんぽなどの熱源に接しないようにするほか、過度の日光浴も控えましょう。また貼ったままで入浴しても構いませんが、熱い温度での入浴やサウナは避けてください。40℃以上の発熱時や激しい運動の際も注意をしてください。
- 4) 精神安定剤など脳の神経をしずめる薬と併用すると、ふらつきや眠気などの症状が誘発されやすくなります。
- 5) 抗真菌薬のイトリゾールや、抗菌薬のクラリス、降圧剤のヘルベッサ、抗うつ薬のデプロメール、ルボックスなどと飲み合わせると、この薬の代謝が遅れ、後になって鎮痛作用が強まる恐れもあるので注意が必要です。
- 6) 抗けいれん薬のテグレトール、強心・抗不整脈薬のジゴキシン、抗血栓薬のワーファリン、制吐薬のゾフランなどと相互作用を起こす可能性がありますので注意が必要です。
- 7) 市販のかぜ薬や解熱鎮痛薬の多くにアセトアミノフェンが配合されており、トラムセットの成分と重複するので、これらとの併用は避ける必要があります。
- 8) パーキンソン病治療薬のエフピーとは併用できませんので、注意してください。
- 9) 飲酒すると、めまいや眠気、呼吸抑制などの副作用が出やすくなるので控えてください。

4. まとめ

我が国ではこれまで、痛みを抑えるのにアスピリンなどの NSAIDs が第一に使われてきましたが、長く使っていると胃潰瘍などの副作用がよくみられました。医療用麻薬が高度の慢性疼痛に対して使えるようになったことで、NSAIDs によって引き起こされていた副作用が減ってくることは確実です。しかしながら、海外に比べて医療用麻薬への抵抗感がまだまだ強い状況です。昔に比べると痛みに対する理解が深まり、その治療もきちんと行われるようになってきていることから、今後は慢性腰痛の治療に医療用麻薬も選択肢のひとつとして期待されます。医療用麻薬による副作用がまったくないわけではないので、その副作用を防止するために、処方する医師の資格や使用法が定められているので、かかりつけ医に十分に相談してください。

激しい痛みは心身を疲弊させ、平穩な日々を奪い去り、日常生活の障害となります。このような痛みは、無理にがまんしないで「かかりつけ医」に相談しましょう。

